

令和4年度第4回きのくにコミュニティスクール推進協議会 協議概要

- 1 日 時 令和4年8月24日（水）10時30分から12時まで
- 2 会 場 ホテルアバローム紀の国 4階 羽衣の間
- 3 テー マ 地域も学校も元気になるきのくにコミュニティスクールのあり方
- 4 協議の視点 今後のきのくにコミュニティスクール推進の方向性について

5 委員による主な意見

(1) 「きのくにコミュニティスクールの実態と学校の意識に関する調査」について

- ・ 学校長自身が悩んでいたり、不安を持っていたり、「こういう活動をしていけばよいのか」で止まっている所が見受けられた。
- ・ 共育コミュニティが先行していたため、地域と繋がって活動ができていたらよいのではないかと、という回答があった。コミュニティ・スクールの取組を進めていくことは、子供たちにどのような力をつけるかという教育目標を共に実現していくところに集約していくべきである。
- ・ 学校が不安に感じている部分を、教育委員会と一緒に目指す方向へもっていく取組を行うとよい。市町村教育委員会が学校へ出向き、話を聞く等の丁寧さが必要である。
- ・ 学校運営協議会の成果について、登下校の見守り、学校が地域に開かれたこと、情報が共有できたことに関する回答が多い。情報共有は最初の一步であるため今後も必要であるが、学校運営協議会の委員が学校と課題を共有できていないのではないかと、また学校側が活動をリードできていないのではないかと感じた。
- ・ ここ1、2年はコロナ禍により活動を行うことが難しい学校が多かったと思われる。学校運営協議会ではコロナ禍においてもできる活動とコロナ禍が過ぎてできる活動について考えていく時間にできればよい。
- ・ コロナ禍の課題を逆手にとる発想で成果につなげるのは大切な視点であろう。

(2) 今後のきのくにコミュニティスクール推進の方向性について

○行政として

- ・ 本県はコミュニティ・スクールの仕組みはできているが、温度差もある。今後は未だ動いていない層の「学校」を動かしていくことが必要ではないか。

- ・ 学校長が主体性をもった上でそれぞれの学校の課題や地域に合った学校運営協議会にしていくべきではないか。
- ・ 小・中学校教育、高等学校教育、特別支援教育に関係する課がカリキュラム・マネジメントを先導しながら、これまで積み上げた本県の財産を活かさなければならない。横につながり、子供の学びを高めていくことが重要である。
- ・ 誰がどのように各市町村に伝え、徹底していくかというシステムをつくったり各課それぞれが動いたりしないと、本当に子供の力がつかないのではないか。
- ・ きのくにコミュニティスクールの在り方について、骨になる部分を一貫して伝えていくことが大事ではないか。骨になる部分をぶれないようにした上で、地域性を出せばよい。骨組みを統一したスタイルづくりが今後の検討課題になる。

○学校として

- ・ 全教職員に理解を促すために、地域学校協働活動と連動させながらカリキュラム構成をしていくことが必要である。
- ・ 教職員に働きかける仕組みづくりが大事である。
- ・ 目指す教育目標を子供も知ることが大切ではないか。子供にとって分かりやすい言葉でめざす子供像を伝えたり保護者に学校だより等でアピールしたりすることで、きのくにコミュニティスクールの仕組みの中で教育目標が生きて地域に根つき、より機能する教育目標になると考える。
- ・ コミュニティ・スクールの取組を進めることによって学力もついてくると考えている。学校教育の中で学力を伸ばす取組と社会性を養う取組に併せ、地域の人たちのまなざしや支援を得ることにより、子供たちは本当の学びの意味を知り学習に臨んでいける。外からの支援と学力向上の取組とが相まって子供の力がついてくる。

